

2026 年 3 月期第 3 四半期決算電話会議説明および議事録

参考資料:2026 年 3 月期第 3 四半期決算説明資料

[LinkClick.aspx](#)

(補足) PKG : パッケージ基板

HDI : マザーボード(High Density Interconnect)

■ご説明

2026年3月期 第3四半期決算



- ・2025年度第3四半期累計の前年同期比では、機能材料セグメントで主要製品の販売が好調であったことや、触媒事業の貴金属価格影響が好転したことなどから増収増益となった。
なお、当期純利益は三井金属アクトの株式譲渡に伴う特別損失計上などにより悪化した。
- ・通期予想の前回予想比では、AIサーバー等のハイエンドサーバー市場好調を背景に銅箔事業の増収増益が見込まれること、金属セグメントで金属価格の上昇と為替の円安による収益改善およびそれらに伴う在庫要因の大幅な好転等により、売上高、営業利益、経常利益、当期純利益のいずれも過去最高を見込む。

(単位：億円)	Q1-Q3実績			通期予想		
	2025 実績	2024 実績	増減 (25-24)	2025 今回予想	2025 前回予想	増減 (今回-前回)
売上高	5,422	5,259	163 3.1%	7,500	7,150	350 4.9%
営業利益	717	562	155 27.6%	1,170	780	390 50.0%
経常利益	745	591	154 26.1%	1,200	770	430 55.8%
親会社株主に帰属する 当期純利益	491	521	-31 -5.9%	770	430	340 79.1%

Copyright © Mitsui Kinzoku Co., Ltd. or its affiliates All Rights Reserved.

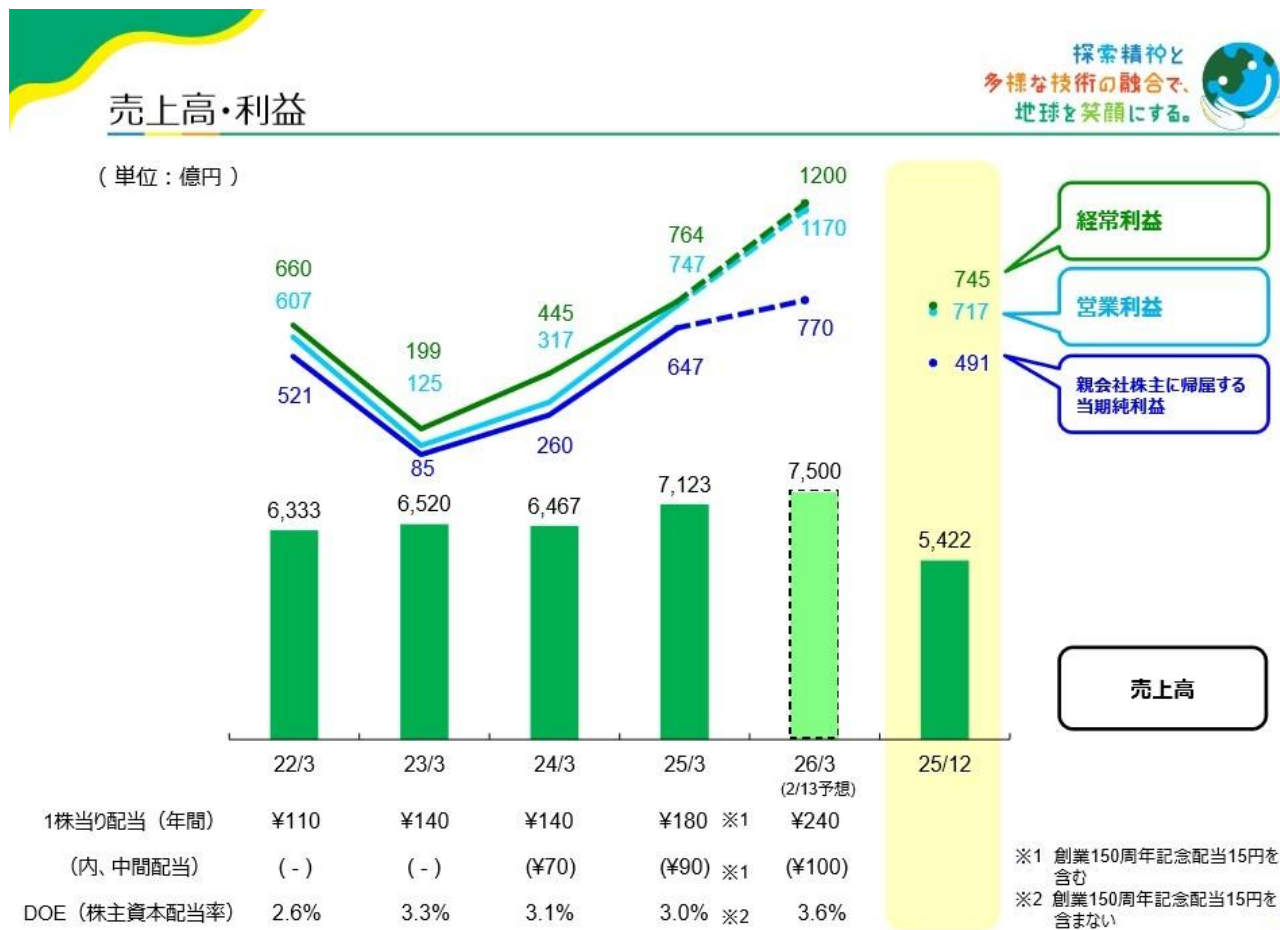
1

決算説明資料 1 ページをご覧ください。

・2026 年 3 月期第 3 四半期累計の売上高は 5,422 億円、営業利益は 717 億円、経常利益は 745 億円、親会社株主に帰属する当期純利益は 491 億円となりました。同期間の売上高につきましては、前年同期比では MicroThin™や、AI サーバー向け電解銅箔 VSPT™など、機能材料セグメントの主要製品の販売量が増加した好転要因はあるものの、三井金属アクトの株式譲渡に伴う売上高減少などにより、当社グループ全体の売上高は 163 億円の増加にとどまりました。

・利益につきましては、銅箔の販売量増加や値上げ効果、触媒事業の貴金属価格影響の好転などにより、営業利益は前年同期に比べ 155 億円の増加、経常利益も 154 億円の増加となりました。
一方、親会社株主に帰属する当期純利益は、三井金属アクトの株式譲渡に伴う特別損失 190 億円の計上などにより、前年同期に比べ 31 億円の減少となりました。

・2026 年 3 月期の通期予想につきましては、第 3 四半期までの実績を反映し、第 4 四半期の事業動向などをふまえて見直した結果、売上高 7,500 億円、営業利益 1,170 億円、経常利益 1,200 億円、当期純利益 770 億円と、前回 11 月 11 日に開示しました通期予想を上回り、売上高、営業利益、経常利益、当期純利益が当社の過去最高となる見込みです。なお第 4 四半期の価格前提につきましては、LME 亜鉛価格 3,100 ドル、LME 鉛価格 2,000 ドル、LME 銅価格ポンド当たり 590 セント、為替は 155 円としています。



Copyright © Mitsui Kinzoku Co., Ltd. or its affiliates All Rights Reserved.

2

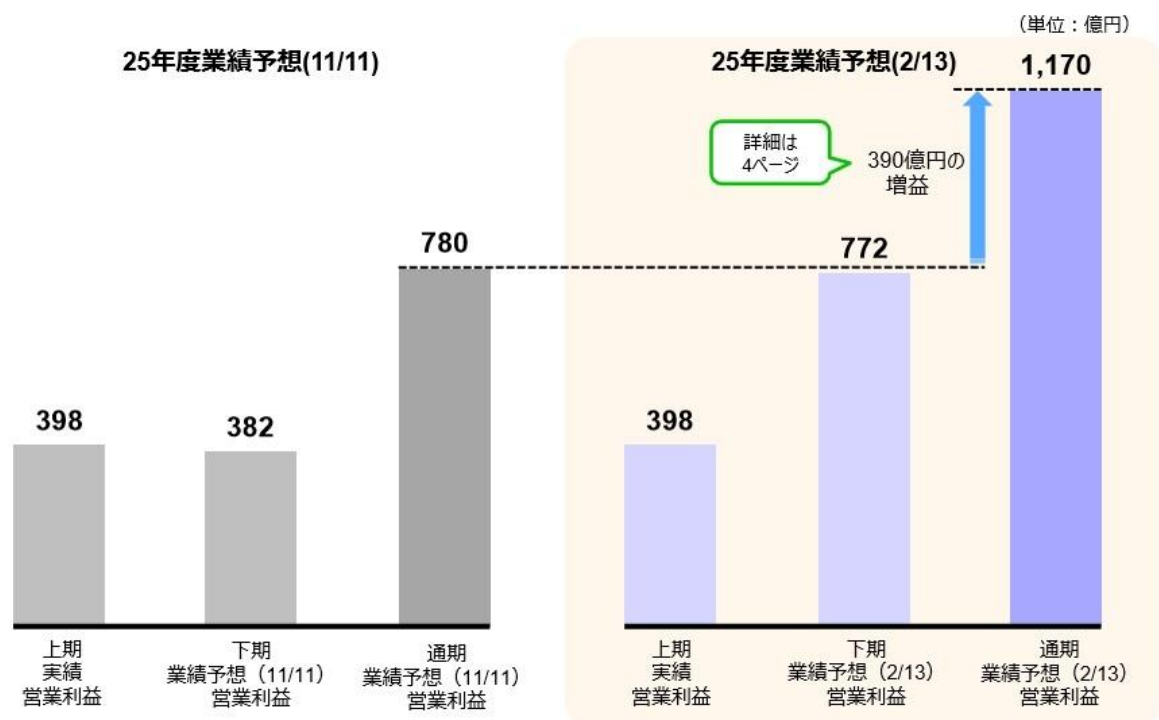
決算説明資料 2 ページ目をご覧ください。

・売上と利益の推移を示したグラフを載せています。グラフの下の方に記載しています、配当につきまして、2 月 13 日に開示しました「2026 年 3 月期通期業績予想および配当予想の修正に関するお知らせ」の通り、期末配当予想を 110 円から 140 円に増額し、中間配当 100 円と合わせて、年間配当予想は 240 円としています。



25年度営業利益見込

25年度営業利益は1,170億円と前回業績予想比で390億円の増益を見込む



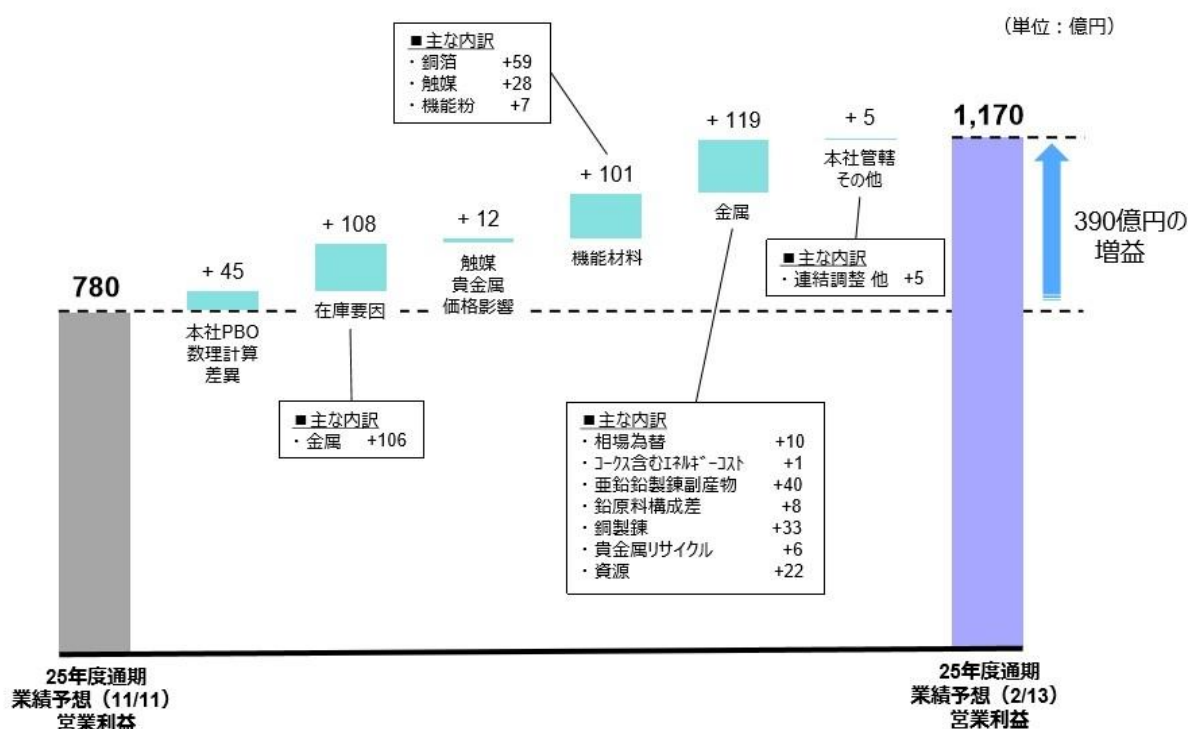
Copyright © Mitsui Kinzoku Co., Ltd. or its affiliates All Rights Reserved.

3

資料 3 ページをご覧ください。

・2025 年度の営業利益につきまして、通期では前回業績予想比で 390 億円増益の 1,170 億円を見込んでいます。

25年度営業利益見込（対前回業績予想）



Copyright © Mitsui Kinzoku Co., Ltd. or its affiliates All Rights Reserved.

4

通期営業利益の前回業績予想との差異につきまして、ご説明いたします。4 ページをご覧ください。

・営業利益は、足元の金属価格の上昇や為替が円安で推移したことにより、左から3番目の在庫要因が108億円好転しており、機能材料事業と金属事業においても、100億円を超える大幅な増益となっています。

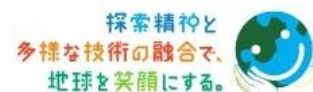
・機能材料セグメントは、101億円の増益を見込んでいます。AIサーバーなどのハイエンドサーバー市場の好調継続により、銅箔主力製品のMicroThin™やVSP™の需要は旺盛であり、値上げなどによるマージン改善なども含めて、銅箔事業で59億円の好転を見込んでいます。

・金属セグメントは、119億円の増益を見込んでいます。主な内訳として、下の吹き出しに記載していますが、相場為替でプラス10億円以外の項目にも、金属相場上昇の影響が大きく含まれており、およそ110億円程度が相場影響と見えています。

・本社PBO数理計算差異につきまして、今年度は金利上昇に伴い、退職給付債務の減少が見込まれることから、45億円の好転を見込んでいます。

・合計して390億円の増益ですが、一過性要因であるPBOの数理計算差異、在庫要因や、触媒事業の貴金属価格影響などを除くと、225億円が実力ベースの増益、そのうち約半分の110億円が相場上昇で押し上げられたものと見えています。

セグメントの業績（１） 機能材料



（単位：億円）

	'25/Q1-3 実績	'24/Q1-3 実績	増減 (25-24)	FY2025 今回予想	FY2024 実績	増減 (25-24)	FY2025 前回予想	増減 (今回-前回)
■売上高	2,336	1,858	478	3,300	2,462	838	2,970	330
■営業利益	455	319	136	640	418	222	525	115
■経常利益	449	314	134	630	403	227	505	125
※実力損益	416	279	136	591	359	232	480	111

※実力損益：経常利益から在庫要因・触媒貴金属価格影響を除いたもの

（機能材料製品）	（主な用途）
銅箔	・高密度半導体パッケージ材料 ・プリント配線基板
触媒	・二輪車・四輪車排ガス浄化触媒
機能性粉体 （電池材料）	・ハイブリッド車向けニッケル水素電池 ・リチウムイオン電池
機能性粉体 （機能粉）	・各種電子部品
レアマテリアル	・ガラス研磨材 ・各種電子部品
セラミックス	・高温用素道具、電子部品用素道具 ・溶融アルミニウム濾過装置
薄膜材料	・フラットパネルディスプレイ
HRDP ※1	・次世代半導体パッケージ用キャリア

経常利益の増減説明

〔 24/Q1-3→25/Q1-3 + 134 〕

銅箔	+135	（MicroThin™・VSP™増販 他）
触媒	+42	（増販、貴金属価格影響好転 他）
薄膜	-25	（在庫要因悪化 他）
本部	-8	（組織改編影響 他）

〔 FY2024→FY2025 + 227 〕

銅箔	+211	（MicroThin™・VSP™増販 他）
触媒	+62	（増販、貴金属価格影響好転 他）
薄膜	-22	（在庫要因悪化 他）
本部	-22	（組織改編影響 他）

※1 2025年10月にHRDP事業を事業創造本部から移管

Copyright © Mitsui Kinzoku Co., Ltd. or its affiliates All Rights Reserved.

12

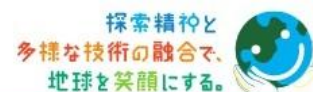
セグメントごとの状況についてご説明いたします。最初に機能材料セグメントです。資料の12ページをご覧ください。

・銅箔事業については、25年度に入り MicroThin™および AI サーバー向け電解銅箔 VSP™が昨年以上に需要が旺盛であり、足元それが継続している状況です。また数量の増加に加えて、昨年実施しました MicroThin™や電解銅箔の値上げに続き、この下期より VSP™含む電解銅箔の値上げを申し入れている状況です。これらにより、対前年同期比で銅箔事業は販売数量増や値上げによる増益、電解銅箔の VSP™比率上昇による単価アップ等により 211 億円の好転を見込んでいます。

・右下に本部の組織改編影響ほかとありますが、これは昨年の 10 月 1 日より HRDP 事業を事業創造本部から、機能材料事業本部に移管し、それに伴うコスト増を大体 10 億円程度織り込んでいます。

・このような状況の下、機能材料セグメントの 25 年度経常利益は、通期で 630 億円を見込んでいます。これは、当社の 25 年度からの 3 年間の中期経営計画「25 中計」の最終年度である 27 年度の計画 510 億円を上回っており、2030 年度目標の 700 億円に並ぶ水準となっています。

セグメントの業績（２） 金属



(単位：億円)

	'25/Q1-3 実績	'24/Q1-3 実績	増減 (25-24)	FY2025 今回予想	FY2024 実績	増減 (25-24)	FY2025 前回予想	増減 (今回-前回)
■売上高	2,550	2,349	201	3,590	3,250	340	3,520	70
■営業利益	358	317	41	580	418	162	355	225
■経常利益	386	346	41	610	445	165	360	250
※実力損益	277	228	50	430	319	111	286	144

※実力損益：経常利益から在庫要因を除いたもの

経常利益増減分析

	24/Q1-3→ 25/Q1-3	FY2024→ FY2025予想
相場・為替	-6	3
T/C条件（亜鉛）	-23	-26
棚卸在庫要因	-9	54
持分法損益	9	10
エネルギーコスト	30	34
(上記のうち、コークス)	(11)	(10)
その他※	40	90
合計	41	165

2025年度年間損益感応度（経常損益）

	フルオープン	予約含む
亜鉛(LME)	± 100\$/t	15.8
鉛(LME)	± 100\$/t	2.1
為替	± 1yen/\$	5.1

亜鉛TC条件

FY2024	165 \$/t
FY2025	80 \$/t

※その他の主な内訳

24/Q1-3→ 25/Q1-3	亜鉛製錬操業差 -15、亜鉛製錬副産物 +25、鉛原料構成差 +26、銅製錬操業度差 +14、銅製錬委託条件差 -17、銅製錬コスト(大定修+24含む) +13、貴金属リサイクル +12、資源 -9
FY2024→ FY2025予想	亜鉛製錬操業差 -40、亜鉛製錬副産物 +60、鉛原料構成差 +24、銅製錬操業度差 +34、銅製錬委託条件差 -23、銅製錬コスト(大定修+24含む) +13、貴金属リサイクル +16、資源 +2

次に、金属セグメントです。資料13ページをご覧ください。

・25年度は経常利益610億円と、対昨年の実績と比べて165億円増加となっています。まず相場為替については、対前期比で平均亜鉛価格はやや高く、平均の為替はやや円高であることから、相場為替は約3億円の好転にとどまっています。ただし直近の金属価格の上昇および為替が円安で推移すること等により、棚卸在庫要因が54億円の増益、さらにその他90億円の増益見込みです。その他の内訳のうち、亜鉛鉛製錬副産物の60億円、銅製錬操業度差の34億円など、金属相場の上昇による影響が大半です。

・今年度の実力損益430億円については、上期に発生しました一過性の鉛原料構成差39億円が含まれるため、それを除く391億円が真の実力損益と考えています。それでも24年度の319億円を上回る数値となりますが、これまでご説明しましたとおり、足元の相場上昇で押し上げられている数値であることをご理解いただければと思います。

・当社の金属事業は、10年以上前から製錬ネットワークと称して、当社が有する国内7カ所の製錬所の強みを生かし、原料の鉱石から金、銀、アンチモン、ビスマスなどの有価金属を副産物として、しっかりと回収していく取組みを継続しています。金属価格の上昇だけでなく、このような中長期目線での副産物回収の成果も出てきていることもご理解いただければと思います。

■ 質疑応答

【機能材料セグメント】

Q. (決算説明資料) P.10 の主要製品の動向について、銅箔の数量で VSP™ の下振れや MicroThin™ の PKG 向けの上振れなどの増減、触媒の増減などをそれぞれ解説いただきたい。

A. VSP™ について、市況や競合状況に特に変化は無く、ハイエンドサーバー需要は堅調に推移しているが、足元下期にサプライチェーンの先の一部モデルでの代替わりに伴い、当社に対する注文も数量調整が入っている。ただし、これは一時的な調整と見ており、代替わり後は元々当社が見ている通り中長期的に右肩上がりに伸びていくことを期待している。MicroThin™ について、HDI 向けは前回見込みから少し上振れ程度で見ている。PKG 向けは、前回決算時の予想では上期から下期に向けての一服を織り込んでいたが、足元スマホ向けも非スマホ向けも好調を継続しており、第 4 四半期は 12 月末の出荷が 1 月にずれたこともあり、さらに伸びるという見込みになっている。触媒について、二輪触媒のインド向けで、インドでの GST 減税に伴う現地の個人消費の盛り上がりでバイクが売れており、当社の触媒の販売量も好調が維持されると見直し増販で見ている。

Q. 銅箔の利益について、今回の通期予想の前年比 211 億円増益の内訳と、第 3 四半期までの 9 か月累計の前年比 135 億円増益の内訳を教えてください。

A. 前年比 211 億円増益の内訳について、MicroThin™ と VSP™ の増販益が合算で約 120 億円。販売単価は、値上げの影響が MicroThin™ と VSP™ を含む電解銅箔の合算で約 40 億円、主に VSP™ の販売数量が増えることによる電解銅箔の平均の販売単価好転が、前回決算時の予想よりさらに大きくなり約 40 億円で合計約 80 億円の好転となっている。コスト関係は、固定費がかなり悪くなると元々見ていたところはいくらか悪化として残るが、変動費で一部好転があり、合算すると約 10 億円の悪化。他には原価計算上の在庫の影響が、銅価が上昇していることで在庫の評価が上がり、10 億円程度の好転となっている。9 か月累計の前年比 135 億円増益の傾向としては同様であり、MicroThin™ と VSP™ の増販益が合算で約 80 億円、販売単価は値上げと販売構成の好転も含めて合算で約 70 億円と、販売関係を合算すると約 150 億円好転している。コスト関係では、変動費は若干好転側に出ているが、固定費販管費の悪化が約 15 億円ある。

Q. 銅箔の経常利益の通期予想の前年比 211 億円増益は、前回決算時の 148 億円増益予想から 60 億円強好転しているが、全て MicroThin™ の好転か。

A. 年度末に向けたコストの見直しの好転などもあり、MicroThin™ の増販の貢献は大きいですが、全てが MicroThin™ ではない。

Q. 銅箔の価格に関して、前回決算以降の追加値上げはあるか。

A. 銅箔の値上げについて、MicroThin™ は今年度に追加の値上げの申し入れはしていない。VSP™ を中心とした電解銅箔の値上げは、前回決算時点でお客様に申し入れを実施しており、この下期から適用している。

Q. 2026 年 1 月の機能材料事業説明会で銅箔事業の利益内訳の開示があり、MicroThin™、VSP™ を含む電解銅箔、FaradFlex® のそれぞれがウエートを持って伸びると見ていたが、今回銅箔の利益全体が上振れる中で、特に数量が上振れている MicroThin™ のウエートが上がっていくと思う。銅箔の利益構成の変化と利益の貢献度について解説いただきたい。

A. MicroThin™ の PKG 向けの増販により、MicroThin™ の利益の伸びは元々の想定よりさらに大きくなっている一方で、電解銅箔の利益は、コストを簡便的に振り分けた見方ではあるが、販売量が想定したよりも少し下がっていても利益は下がっていない。特に販売単価について、足元取り組んでいるミックスの改善効果として、VSP™ の品種構成だけでなく、電解銅箔全体でマージンの低い製品を減らしていく取り組みが着実に進んでおり、それにより利益にプラスが出ている。足元 MicroThin™ の販売量の伸びが非常に好調で目立っているが、MicroThin™ も電解銅箔も利益が伸びている。

Q. VSP™ の販売量について、サプライチェーンの先のモデルチェンジで一時的な調整が入ったことについて、CCL や PCB 等のどの段階の話なのか。また、そういった一時的なモデルチェンジの影響を除いたベースだと、本当に販売数量が増えているのか。

- A. VSP™の当社の直接のお客様は CCL メーカーになるが、当社製品はビッグテックの複数の会社の製品で採用されていると認識している。サプライチェーンの先のモデルが変わっていく中で使われる銅箔の品種も変わっていくので、これまで当社が出してきたものからの切り替わりで注文の調整が起きている。モデルが切り替わったあとは、当社として販売する品種も変わっていくと考えている。
- Q. VSP™について、数量は横ばいで見ているが、スーパーハイグレード品の比率はどう上がっていくのか解説いただきたい。
- A. VSP™のハイエンド品について、HVLP4 以上のスーパーハイグレード品と呼んでいる製品の比率が、前回決算時の下期見込みでは VSP™の中で約 40%と見ていると説明したが、今回見直しでは約 30%と見ており、スーパーハイグレード品の伸びが若干遅れると見ている。ただこの先に向けての伸び方は、モデルチェンジに伴い当社の販売量に一時的な調整が入っているところが回復し、当初の予定通りの伸びを見込んでいる。
- Q. VSP™の調整について、例えば HVLP4 のスーパーハイグレード品を使うはずだった製品に HVLP2 がいったん採用されることで数量が伸び悩んでいるといった話なのか。VSP™は来期の第 1 四半期からしっかりとまた伸びてくることを予想しているか。
- A. サーバーのモデルチェンジで高機能化していく流れの中で、今まで高機能な銅箔が使われていた箇所に、ハイグレードでない銅箔が使われることは考えにくいと思っている。サーバー自体のモデルチェンジであるため、サプライチェーンの途中のどこかで、サーバーの生産が少し古いものから新しいものに切り替わる端境期が今年度下期になっているとご理解いただきたい。VSP™の販売量回復の時期については、来年度早々にもしっかり回復すると考えている。
- Q. 電解銅箔について、前回決算ではサーバー自体の需要が好調のため RTF や HVLP1 でも非常に引き合いが増えているという話があったが、その辺りの状況は変わらないのか。VSP™のスーパーハイグレード品の比率は当初見込みより下がっているが、電解銅箔のミックス改善の効果が前回予想比でプラスに効いていることについて解説いただきたい。
- A. 電解銅箔の平均の販売単価差は足元好転している背景には、通信インフラ向けの需要が非常に旺盛な中で、よりマージンが取れる製品が増販しており、端境期で減っている部分があってもそれ以外の構成ではマージンの高い製品へのシフトが起きている。これらは足元の旺盛な需要に裏付けられた好転で、電解銅箔の品種がたくさんある中で、元々あまり儲かっていない VSP 箔ではない電解銅箔をどんどん減らしていく取組みが、着実に実現していると認識している。
- Q. VSP™について、AI サーバーのモデルチェンジが遅れているという話があり、ハイエンドの銅箔とガラスクロスが足りずに一部認定が遅れているという話も聞いているが、そういった事象を認識しているか。
- A. 認定の遅れが当社の販売量に対して影響しているとは考えていない。
- Q. MicroThin™の PKG 向けについて、改めて好調の背景を教えてください。これは素直に DRAM を中心とするメモリーメーカーの増産が追い風になっているという理解でいいのか。1 月の機能材料事業説明会では、来期の PKG の特にメモリ向けがあまり伸びない想定だった。足元の需要環境や受注環境を見た時に、来期に関して目線が変わりしっかり伸びる想定になってきたか。
- A. MicroThin™の PKG 向けについて、メモリが好調ではあるがスマホ向けも非常に好調で、スマホの販売状況自体好調のためモジュール等の需要も堅調であったという認識である。一方で、非スマホ向けもメモリ向けが非常に強く、足元まだそこまで大きくないが光モジュール向け等の需要も堅調に伸びている状況であり、全体に強いという認識である。今後に向けては、過去から MicroThin™はある程度シクリカルな動きもあるが、足元では落ち込むような動きは特に見当たらず順調に伸びている。来期の見通しに向けては足元の好調な状況を踏まえて改めて検討したい。
- Q. MicroThin™の PKG 向けで、スマホ向けと非スマホ向けの比率は従来から何か変わったか。
- A. 非スマホ向けが若干多いという見方から変わっていない。
- Q. MicroThin™について、今年度は値上げを打ち出していないが、来期以降まだ値上げをしていくのか。
- A. 常に製品の付加価値や提供価値を考えての価格を検討しており、来年度以降に改めて値上げを申し入れる可能性はある。

【金属セグメント】

- Q. P.13 の金属の経常利益増減分析で、その他 90 億円の内訳のうち、亜鉛鉛製錬副産物プラス 60 億円と銅製錬操業度差プラス 34 億円について内容と来年度以降の持続性について解説いただきたい。
- A. 亜鉛鉛製錬副産物プラス 60 億円は、亜鉛鉛製錬の操業で副産物として回収している金・銀・ビスマス・アンチモン・錫・銅などの各種金属の相場が、足元特に金・銀が大きく上昇していることで利益がかなり大きくなっている。従来分析では、亜鉛鉛製錬の副産物は亜鉛製錬操業差あるいは鉛製錬操業差に合算しているが、影響があまりに大きいので数字を分けて記載した。銅製錬操業度差プラス 34 億円は、銅製錬の差量部分で、主に銅・金・銀の足元の相場が上がっていることによる収入増である。継続性については、差量も副産物もかなり数量の変動が大きい、足元の相場が継続するのであれば、高い水準の利益が引き続き見込める。
- Q. 八戸にある亜鉛製錬の工場の地震影響を教えてください。
- A. 青森県東方沖地震の八戸工場への影響について、亜鉛地金の生産量を前回予想から少し下げており、10 億円にいかないぐらいを操業度の悪化影響を見ている。壊れた設備の修繕費は、特別損失として定修の実施時に精査され金額が確定していくと思っており、あまり大きい金額になるとは考えていない。

【全社】

- Q. 通期予想の営業利益 1,170 億円から、一過性の好転要因 84 億円と在庫評価 219 億円を引いた営業利益 860 億円ぐらいが、来期業績予想を考える時のたたき台となるか。来期損益のガイドをお願いしたい。
- A. 来年度の見通しについては足元精査中であるが、方向感として、機能材料事業は触媒の貴金属価格影響とインジウム在庫要因を除外した実力損益から、銅箔を中心に増販基調が継続することによって利益の伸びを期待したい。一方で金属事業については、足元の金属価格や為替で非常に強い数字が出ており、それが来年度に向けても横ばいで継続するという前提とした場合に、足元の損益見通しから一過性要因と在庫要因を除外して、さらに来年度は亜鉛製錬と銅製錬の定期修繕を予定しており約 40 億円減益となる。また、足元交渉中である亜鉛 TC の交渉結果などが影響してくると見ている。

以上